

聖書：創世記 10：1～32

説教題：ノアの子孫の諸氏族

日時：2023年5月21日（朝拝）

聖書の中には時々このようなカタカナの名の羅列が出て来て、それらにほとんど親しみのない私たちにとってはチンプンカンプン、これに何の意味があるのかと思ってしまいやすいものですが、その意味が分かる人にとってはこれくらい興味深い箇所はないというほどのものかと思います。とはいえ、ある学者によるとここに全部で70ある名前の内、約1/3は今日の研究を経ても良く分からないそうです。そのような学者たちよりももっと分からない私たちには益々意味不明な箇所となりかねません。しかし一般に「民族表」と呼ばれるこの創世記10章は、ある目的を持って書かれています。ここに見られるいくつかの特徴に注目しながら、この章が語ろうとしているメッセージに少しでも迫って行くことができればと思います。

10章1節に「これはノアの息子、セム、ハム、ヤフェテの歴史である。大洪水の後、彼らに息子たちが生まれた。」とあります。大洪水をくぐりぬけて生き残ったのはたったの8名でした。ノアと3人の息子たち及びそれぞれの妻たちの計8名です。その彼らに神は9章1節でこう言われました。「神はノアとその息子たちを祝福して、彼らに仰せられた。『生めよ。増えよ。地に満ちよ。』」これは創世記1章の神の言葉を思い起こさせるものです。創世記1章28節：「生めよ。増えよ。地に満ちよ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地の上を這うすべての生き物を支配せよ。」神は罪で一杯になったこの世界を洪水によってきよめた後、もう一度新しい出発を与えてくださいました。あの創世記1章の時と同じように彼らを祝福して、「生めよ。増えよ。地に満ちよ。」と言って送り出してくださいました。その祝福を受けて、大洪水後にノアの息子、セム、ハム、ヤフェテに息子たちが生まれ、そこから全世界の民が増え広がって行ったという記録がここにあります。

まず注目に値することは1節に「これはノアの息子、セム、ハム、ヤフェテの歴史である」と記されているのに、その後の記録はその順番になっていないということです。この10章はヤフェテ、ハム、セムの順に記されます。ここにこの記録がある（神学的）意図を持って書かれていることが暗示されています。それはどういうものでしょうか。創世記では一般に神の約束を受け継ぐ系譜は後に記され、そうでないグループ

プの方が先に来ます。創世記 4～5 章で見たカインとセツもそうでした。カインが先に記され、選ばれたセツの流れは後に記されました。この後出て来るイシュマエルとイサク、エサウとヤコブも同じです。前回 9 章 26 節でノアは「ほむべきかな、セムの神、主」と賛美し、セムの行動の内にセムが神の選びの恵みにあずかっていることを見て取って神を賛美しました。ですからそのセムの子らはこの民族表では一番最後に置かれます。そしてそのセムに焦点を当てるため、セムとの関わりにおいて地理的に遠いヤフェテの子らのことが記され、次により関わりのあるハムの子らが記され、そうして最後にセムの子らが記されるという順番になっていると考えられます。

では順番にその記録を見て行きたいと思います。まず 2～5 節はヤフェテの子らです。ここに計 14 の名があります。この中で聞いたことのある名はどれくらいあるでしょうか。2 節にマゴグとありますが、これは聖書で後に出て来るゴグとマゴグに関係するとすれば、それらは北から攻めて来る国の名として出て来ますから、北方に位置する人々だろうかと思います。次のマダイはメディヤ人のことと言われます。また少し先に進んで 4 節に出て来るタルシシュの名は聞いたことがあるでしょう。ヨナが主の言葉に逆らって舟で向かおうとした地で、トルコまたはスペイン南部の町と言われます。次のキティムは地中海に浮かぶキプロスのことです。これらヤフェテの子らは後のイスラエルから見て北方から西方にかけて住む人々のようです。北方のカスピ海、黒海周辺から西方のエーゲ海、地中海方面に広がる人々です。トルコ、ギリシャ、ヨーロッパに位置する人々です。前回 9 章 27 節でノアは「神がヤフェテを広げ、彼がセムの天幕に住むようになれ」と預言しましたが、確かにヤフェテの子らは広い地域に住み、また前回触れましたように、後にパウロの世界伝道が行われる地となり、異邦人教会が多数打ち建てられ、神の民に組み込まれる祝福にあずかります。

続く 6～20 節はハムの子らです。先のヤフェテの子らが北方から西方にかけて広がる人々だとすれば、こちらは主に南側に広がる人たちと考えられます。6 節でハムの子らとして記されているクシュはエチオピアあるいはスーダン、ミツライムはエジプト、プテはリビア、カナンはその通り、カナンです。このハムの子らの記録でまず目を引くのはクシュが生んだと言われるニムロデです。彼は地上で最初の勇士となったとあります。また 9 節に「彼は主の前に力ある狩人であった」ともあります。「勇士」と訳されている言葉は支配者、権威者、君主、あるいは暴君といった意味を持つ言葉のようです。古代の王たちは狩猟の腕前を誇りました。ニムロデはその点で特別に力

を持っていた人のようです。「主の前に力ある」というのは、神の前でもそのように力ある者という意味で、つまり最上級の表現であると考えられます。とてつもない力を持つ者、非常に恐るべきハンターであったということです。その彼の王国の始まりとして、10 節にまず記されているのはバベルです。これは次の 11 章で見るバベルの塔のバベルと同じであると考えられます。人々はそこで神に反逆するために集まりますが、そのような動きがハムの子らから出たということです。また彼が打ち建てた王国として、バベルに続いてウルク、アッカド、カルネと記され、それらがシナルすなわちシュメールの地にあったとあります。シュメールとはメソポタミアの地、あのティグリス・ユーフラテスに挟まれた地域のことです。さらに 11 節に「アッシュルに進出し、ニネベ、レホボテ・イル、カルフ」と続きます。ニネベとはアッシリアの首都となるところです。つまり後にイスラエルを攻撃し、捕囚とするアッシリアやバビロンがハムの子らから出たことが分かります。

次に 13～14 節に記されるのはミツライム、すなわちエジプトです。イスラエルはやがてエジプトに下り、そこで奴隷となります。ですからこのハムの子らの苦役の下からイスラエルは救い出されることとなります。14 節の最後にはイスラエルを度々苦しめるペリシテの名も出て来ます。

15 節以降はカナンから生まれ出た諸氏族です。シドンはイスラエルの北方フェニキヤの町の名となります。その後のヒッタイト、エブス人、アモリ人、ギルガシ人、ヒビ人などは、以後、聖書に良く登場するカナン人の代表的な氏族です。19 節にはカナン人の領土が少し詳しく記されます。「シドンから・・・ガザに至り」とは、それぞれ北の端と南の端を示し、ソドム、ゴモラ、・・・と続く名は東の境界線を示します。前回、ノアは「カナンはしもべとなれ」と預言しましたが、まさにこの地域が後にイスラエルに与えられることとなります。そのことがここに意識されていると言えます。

最後 21 節以降はセムの子らです。この記録でまず特徴的なことはエベルの名が特筆されていることです。21 節に「セムはエベルのすべての子孫の先祖であり」とあり、その後の記録を追うと、エベルの名は 24 節に出て来ます。セムには何人かの子どもが生まれ、その中のアルパクシャデからシェラフが生まれ、シェラフからエベルが生まれました。そして 25 節にエベルには二人の息子が生まれ、一人の名はペレグ、もう一人の名がヨクタンであったとあります。そしてペレグについて「その時代に地が

分けられたからである」というコメントがついています。またペレグという名には印がついていて、欄外を見ると「分ける」意の語根「パラグ」の派生語と注釈されています。つまりここには言葉遊びがあるということです。この時代に地が分けられる出来事が起こり、それと関連してエベルの子はペレグと名付けられた。このことに注目させるため、最初からエベルにスポットライトを当てるような言い方がされたのだと考えられます。では「その時代に地が分けられた」とは何を指しているのでしょうか。議論はありますが、有力な見方は次の 11 章で見るバベルの塔の出来事がこの時に起こったということです。そこでは言葉の混乱、そして民族の分裂が生じます。その出来事はセムの系譜においてはここに位置付けられるということです。そしてその分裂はセムの家系にも起こったということなのでしょう。その結果、ペレグとヨクタンは分かれ、別々の道を行くことになった。そうしてこの後 10 章残りの部分で記されるのはヨクタンの子です。ではもう一方のペレグの子孫はどうなったのでしょうか。ペレグの子たちについては 11 章 1～9 節のバベルの塔の出来事の後に記されます。11 章 10 節に「これはセムの歴史である」と始まって、彼がアルパクシャデを生み、彼がシェラフを生み、シェラフがエベルを生んだというところまでは今日の章と同じです。しかしその後、16 節でエベルがペレグを生んだことのみが記され、以降はペレグの子孫について記されます。そしてこちらの流れからやがてアブラハムが生まれます。つまりこちらが選びの系譜であるということです。ヨクタンはセム系ではあるものの、選びの系譜ではないということです。ですから創世記 10 章全体は選びにあなかったのではない人々、簡単に言えば後のイスラエルとはならない、異邦人世界の民族のリストと言えます。

果たしてこの創世記 10 章の民族表にはどんな意義があるのでしょうか。まずこの章が語っているメッセージは、神は全世界の人々への広い関心を持ち、彼らを祝福しておられるということではないでしょうか。創世記 10 章は次に見る創世記 11 章 1～9 節とセットになっている箇所です。創世記は「これは〇〇の歴史である」という表題が出て来るたびに新しい内容に移りますが、10 章 1 節に「これはノアの息子、セム、ハム、ヤフェテの歴史である」とあり、次にこのフレーズが出て来るのは 11 章 10 節、「これはセムの歴史である」という部分です。ですから 10 章の民族表と 11 章 1～9 節のバベルの塔の記事はワンセットのものと考えられていることが分かります。そしてこの二つの記事は時間的にどういう関係にあるのでしょうか。11 章 1 節に「さて、全地は一つの話しことば、一つの共通のことばであった」とあるのに、今日の民族表の

中では、たとえば10章5節に「それぞれの地に、言語ごとに、云々」という表現が出て来て、すでに言語が多数あったと言われていました。その後の20節や31節も同じです。とするとバベルの塔の出来事の方がこれらの記述に先立つこととなります。しかしもしバベルの塔のことを先に書き、その後で世界の各地に人々が広がったことを書くと、どうなるでしょう。人々の広がりや、さばきの結果としてのみ見られることとなります。様々な民族が分かれ出て、世界各地に散らばっているのは、神の呪いによるという光の下で見られることになり、否定的な意味が強く押し出されることとなります。しかしこの民族表が先に書かれるとどう違って来るでしょう。これが先に来ることによって、全世界への人々の広がりや9章1節の「生めよ、増えよ、地を満たせ」という神の祝福の光の下で見られることとなります。世界各地への人類の広がりや神の御心にならなかったことであり、神の祝福の現れであることとなります。確かに後に見るようにさばきという側面もここに加わります。しかし基本は神の祝福の下で創世記10章の民族表は読まれるべきであるということです。しかも先に触れたように、やがて選びの民として現れる人々はここに登場していません。そういう世界をも神は「生めよ、増えよ、地を満たせ！」と言って祝福し、導いておられるのです。パウロも使徒の働き17章25～26節でこう述べています。「神ご自身がすべての人に、いのちと息と万物を与えておられるのですから。神は、一人の人からあらゆる民を造り出して、地の全面に住まわせ、それぞれに決められた時代と、住まいの境をお定めになりました。」

またここに全世界の民は一つであることも示されています。世界には色々な民族が分かれ住んでおり、お互いの間に色々な違いがあります。しかしそれらはみなノアの三人の息子たちから生まれました。ですから大きく見れば人類はみな兄弟です。起源は同じです。ですから互いに一つとなって平和の内に歩むべき者たちです。

しかしこのことだけを言えば世界はうまく行くわけではありません。今日の箇所には次回見る出来事の暗示となる記述がありました。ニムロデは力ある者でバベルを建設しましたが、それは次回見るバベルの塔の出来事と関係すると思われます。そこで人々は神に向かって反逆します。エデンの園における罪の繰り返しです。また洪水後にノアが罪を犯し、その子ハムは一層の罪を犯し、そのために「呪われよ」と宣言されたカナンとその諸氏族の名がここに記されました。彼らはその性質をこれから益々発揮して行くことでしょう。人の心が思い図ることは幼い時から悪であるという事実

は洪水後の世界も変わりません。そんな世界の救いと祝福のために、神はこの後、セムの流れの中に創世記 3 章 15 節で与えた救いの約束を担う者たちを保ち、それがアブラハムに至ることになります。大切な視点は神はアブラハムへと至るセムの選びの系譜に属する人たちのみを救い、後は捨てているのではないということです。むしろこの創世記 10 章に示されているすべての民族に対する神の広い関心と祝福の下で、アブラハムへと至る神の選びのみわざはとらえられ、理解されるべきであるということです。そのことは創世記 12 章 3 節のアブラハムに対する召命の言葉にもはっきり示されます。主はそこで「わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう」と言った後、「地のすべての部族は、あなたによって祝福される」と言われました。神の選びは他者に祝福をもたらすための選びであり、神の大きな目的は全世界の祝福にこそあるということがはっきりそこで言われます。

私たちはこの創世記 10 章を 9 章 1 節の「生めよ、増えよ、地を満たせ」という神の祝福の言葉とセットで読むことによって、全世界のすべての民族に対する神の思いを改めて自らのものとして持つ者とされたいと思います。私たちは救いにあずかり、選びの恵みにあずかりましたが、神はそうでないこの世を捨てておられるではありません。私たちも以前はイスラエルに属さず、その救いから遠く離れた異邦人の立場にあった者たちでした。しかし先に救いの恵みにあずかった人々の証しを通して、救いをいただく者とされました。そのように導かれたのは何よりも神ご自身が全世界を、すべての民族を求めてくださっている神であられるからに他なりません。ですから私たちも同じ目での世界を見る者でなくては！と思わされます。神は全世界の神であり、そこに住む人々に救いを与えるために、アブラハムに至る導きを与えようと、この創世記で続けて働いて行かれます。この神を見上げ、感謝して、私たちもこの神を映し出す歩みをする者へ導かれたいと思います。神の選びの恵みはさらに他の人々にこの恵みを伝えるためのものであることを覚えて、その務めに生きる者へ、そして神の御国の完成のために仕える者へ導かれたいと思います。